
文献学と解釈学の中のテキスト記号学

——文献資料から作品へ——

フランソワ・ラストイエ

〈CNRS, フランス〉

要約 何世紀にもわたって、テキストから遠ざかってしまった哲学的解釈学と実証哲学に惹きつけられた文献学との分離が進み、両者の間の隔たりが増大していることは、残念なことと言えよう。さらに他面、形式言語学と認知言語学は、文化の科学に適した歴史的比較の方法論を放棄してしまい、不完全なモデルを作り出した。そのためこれらの言語学は文献学や解釈学のプロブレマチックとの接触を失ってしまった。

その反面、コーパス言語学は電子文献学を発展させ、さらにソフトウェアのアウトプットの解釈学に直面することになった。しかし（内容面と表現面との間で、対をなす規制された適合としての）テキストのセミオシスを説明するだけでなく、（生成論的、解釈学的）**観点**と（信憑性における表現と同様に、正統性における内容に対する）**保証**の両極について説明するテキストモデルを作り上げることが課題として残されている。

これにより、一方では内的言語学と外的言語学とを分節することができ（語用論ではできないことである）、他方ではテキスト記号学を媒介として、文献学と解釈学との和解をはかることができる。すなわち、文献資料（ドキュメント）が文献学的概念、テキストが言語学的概念、作品が解釈学の対象であるように、テキストのセミオシスは、様々な客観性のレベルとそれに結びついた学的領域の分化を理解し説明するための特権的な場に思える。

キーワード：保証、観点、文献学、解釈学、記号学、文献資料、テキスト、作品

1. テキスト記号学の挑戦

テキストの科学や芸術は、今日では電子資料と関わり、それが経験的なものとの新しい関係や、文献学の再生とも関わっている。今日、テキストと文献資料、図書館とアーカイヴ、コーパス言語学と電子文献学との差異は相対化されており、新たな分類が求められている。

(i) 〈文献資料〉の文献学的概念とは、時間的安定性のある物質的媒体への、一般には動産物上への記入＝書き込みと結びつけられている。つまりこの概念は、〈電子文献学〉と私たちが名付けたものの空間を拓くデジタル化により、全く一新されたと同時に相対化されもした。

各々のディスプレイで復元された電子資料は、伝統的な文献資料の連続性もなければ、物質的安定性もない。その代わりに、電子資料には、規格化したり、相互運用可能なコーパスでは、再編したり、まとめたりすることができるという利点がある。コーパスへ直ちにアクセスできることにより、ソフトウェアを用いて道具化された行程を可能にした。

(ii) 基礎的な言語学的単位である〈テキスト〉は、論理的な文法的な分析ではとらえることができず、解

積学的倫理に応じる方法論を必要とする。テキストは、批判的方法で作られたコーパスのなかで、必ず読み取られる。どのようにしてテキストをコーパスの中で存続させるのか。コーパスは解釈学的仮説を有効と認めるであろう。テキストをいずれ正真正銘の間テキストにする解釈の行程を、コーパスの中で、どのように書き込むのだろうか。その返答はそれ自体、テキスト、ジャンル、言説の類型学に拠っている。

(iii) 最後に、テキストは審美的であると同様に倫理的な価値をもつ営みなので、どうしてある種のテキストは〈作品〉の一部となるのだろうか。この問いは、いかなる記念碑化、いかなるアカデミックな、法律的なあるいは宗教的な正典化そのものの外で立てられている。この問いは——もはやコミュニケーションではなく——伝達と関わり合いになる。こうしてこの問いは、テキスト記号学を媒介として、文化記号学に通じているのである。

思弁的体制からの脱却——ただし、記号学は対象化の特別な手順についての省察方法をしなければならない。それというのも、記号とテキストは少しも与えられておらず、解釈の中で構築されるものであるからだ。それらは一般的な経験、科学的な真の客体を構成するのであって、事象や状態の表象ではない。以下のような二つの原則が、どうしても、テキスト記号学には必要である。

(i) 〈文献学的〉原則：テキストを作成し、たとえばその信憑性を確定することで、その位置づけをしなければならない。さらに電子文献学の場合、テキストをその処理に最適な書式にし、時にはコード化、識別ラベルを作成しなければならない。コーパス言語学のこの特徴的な諸段階が喚起していることは、文化の科学においては、データとは自らに与えるものであるということである。

いくつかの理論的潮流、とりわけチョムスキー理論では、エクリチュールは言語学の分野に属していないと考えられているだけにいっそう、文献学的次元は、言語哲学に認められないままだ。

(ii) 〈解釈学的〉原則は、物質的解釈学、中でも特にコーパス言語学に特有の機能的解釈学に精通しているそれは、新たに観測可能なものの発見の原則である。解釈するとは、すでに与えられた一連の文字を判断することではなく、価値をつけ、そしてあらゆる分析レベルで、意味の生産様式に変化させることだ。

2. 文献資料、テキスト、作品

では、文献学と解釈学とが誤って離反してしまったこと、言語学の発展から遠く隔たったままではいられないこと、このことと相関的であるが、言語学は文献学や解釈学との関係を再び取り戻さなければならないということ、こうした仮説から始めよう。

学的領域の用語で抽象的に検討するよりもむしろ、つまるところ文献学の領域である〈文献資料〉と、言語学の領域である（あるいは、そうであるに違いない）〈テキスト〉と、解釈学の領域に特に属している〈作品〉——その複雑性において取り上げるために、批判的解釈を必要としているのだから——との関係性を詳しく検討する方が有益だと思われる。文献資料、テキスト、そして作品の概念は、通常は単語や節だけに自己限定する言語哲学には、未知のものであり続けるので、この調査は必要だと思われる。

したがって、文献資料、テキスト、そして作品それぞれの概念を関連づけるため、私たちはセミオシスの新-ソシュール理論に、文献学的要素と解釈学的要素を組み合わせようとする。そうすることで、言語学や文学批評に今日欠けている価値や正統性の問題を提起するに至るだろう。こうした問題にまで及ぶ言語学を媒介することで、（あまりにも理念化された）解釈学と（あまりにも実証化された）文献学は、コーパス言語学の飛躍的発展的発展によって拓かれた新たな状況の中で出会うことになるだろう。この点を詳しく見よう。

(i) 保存やコミュニケーションを特権化するため、現在では、テキストと作品を論じる方を、私たちは多くの場合好んでいるが、それでは解釈の問題提起を避けていることになる。電子文書化の飛躍的発展とともに

に、数名の作家が、文献資料の概念から包含概念を作り出そうとしている (cf. Salaün, 2010)。実際文字列が文献資料の一単位だと認める限りにおいてしか、情報科学は文献資料に接近できない。したがって、形態素、レクシ、言語学の単位は文字列に明快には対応していないので、自然言語処理から見れば、そこから生じる様々な困難を私たちは知ることができる。

(ii) テキストのシニフィアンは慣習的に媒体から自律させられているので、〈テキスト〉とは文献資料の〈内容〉である。イェルムスレウの記号学の用語では、言語学は関係性の科学、そのように理解された形式の科学として定義されているので、文献資料の媒体は、表現の実質、その形式の記号表現に属している。しかし社会の要求やコーパス言語学の飛躍的發展にもかかわらず、テキスト言語学は、二次的な場所を占め続けている。

(iii) テキストに適用される〈作品〉の概念は、たとえば文学や哲学のような、質的不均衡の評価と記述に専念する批評領域に依拠している。作品概念がアカデミックな言語学と異質なのは、その中心となる文法が、少しも特殊なものを詳述しようとするものではなく、そして例外のような特異性を批判することで、最も一般的な規則性を常に追求しているからである。作品の特殊な練り上げは、美的あるいは倫理的であるかどうかはともかく、個別的な実践に着手することから生じる。作品は内容面と表現面との間の特殊な適合にあり、独自のセミオシスにより表される特殊な対を特徴としている。

テキストのセミオシスが、一方では文献資料の、他方では作品の構想の、並行した練り上げによって確立されるという仮説について明らかにしていこう。ソシュールを敷衍するならば、最初の二つの「カオス」が結合することで、複雑な秩序、テキスト性の秩序を引き起こすと言えるだろう。

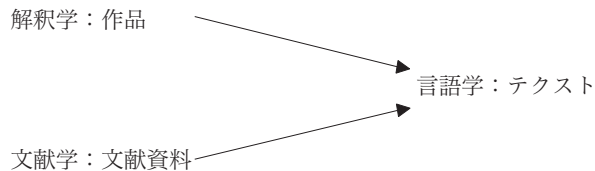


図1 テキストにおける文献資料と作品の収束

テキスト、文献資料、作品それぞれの概念は古くから対立するアカデミックな伝統下にあるのに、ではどのようにしてこれらの概念を和解させるのか。文化的対象の基礎モデル (ラスティエ, 2008) により、一つの研究方向を示すことが可能となる。

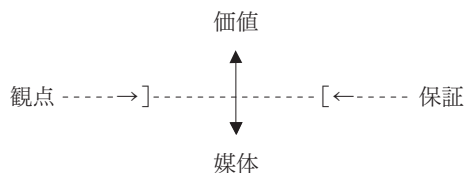


図2 文化的対象の基礎モデル

(i) (記号システム全体にとって、表現と内容それぞれを指し示す用語) 価値と媒体との間の記号学的二重性は、新-ソシュールの見地に立つならば、言語学で論じられている。そこでは内的言語学が問題となる。

(ii) 観点と保証との間で包括する二重性は (「署名」としての観点と鑑定としての保証にとっての) 文献学の伝統を、(エートスとしての観点にとっての) 修辞学の伝統を、そして (正統性の批判的問題に関わるものにとっての) 解釈学の伝統を必要としている。これらの伝統は——少なくともそれは私の願望でもあるが——語用論の埒内には収まらない外的言語学で統合される。

「いかに」を明らかにするために、文献資料、テキスト、作品に対して、生成論的規定、利用規定、客体化規定、行程規定、最後に伝達規定を検討していきたい。

生成論的規定——文献資料、テキスト、作品三者の生成は軌を一にしてはいないので、書くことの動作と手順 (*la scriptio*)、テキストの作成計画 (古代修辞学の *inventio* と *dispositio*)、(倫理的または美的な) 実践計画による作品の布置化に、生成の理解 (*l'accomodatio*) の予測を加えて、これらを識別する必要がある。

文学の草稿の場合、人は多種多様な文献資料から作品の統一性に移行する。最初、複雑な記号学は遊戯だが、それは紙面上での空間的配置、削除線、法 (モード) の意味、文字のサイズの差異、制作の注釈であるメタ言語的な件などを考慮に入れた遊戯である。

この推敲は発見的価値があり、作品の美的計画は、制限されることで明確になる。その言葉遣いは、その文体、(利用されてきた言語学的手段の情動的統一として理解された) 感覚能の中で定義される (cf. *infra*, 注11)。

利用規定——聖事、国家の誕生から、エクリチュールは、長い間秘密の次元を守り続けてきた。修練、時には通過儀礼を必要としたため、エクリチュールは特権階級 (書字生、聖職者、書生) の専有物だった。文献資料の単一性はその信憑性を保証し、その利用を制限しようとする予防策はエクリチュールを保証していると思われる。

〈文献資料の利用〉は印刷が普及されるまで、非常に制限されていた。情報科学は利用権利を規格化、そして形式化することで、文献資料の中に判読するための前提条件を加えた。

〈テキストの利用〉は単に言語とコーパスの知識に依拠しているのではなく、とりわけ、テキストの生成、普及、受容を取り巻く社会的実践にも依拠している。書籍や読書のいっさいの歴史はそれを物語っている。

最後に、〈作品の利用〉とは、秘教と顕教との対置では十分説明されていないエクリチュールの戦略により左右される。要するに、それぞれの作品は、作品の構想を復元できる読者を選んでおり、さらに、そうするために、作品解釈が引き起こすまさにその難解さによって、読者を鍛える。

行程規定——記述のレベルに応じて、これらは記述の判読、読み取り、解釈とさらに分けることができる。

(i) 〈文献資料の判読〉は言語、文字を特定し、必要とあれば、省略文字、あるいは文字化けを補う。つまり、一時的ではあるが、時にはこの判読は表現面を明らかにする。それがテキスト生成の前提必要性に関わることだと考えられる。

デジタル化により、〈工業的読解〉(Giffard) が、つまり、情報検索の自動化による電子資料の履歴が可能となった。この「読み取り」は判読でしかない。

(ii) 判読を前提とする〈テキストの読み取り〉は、シュライエルマッハーが〈文法的〉解釈と名付けたものと合致する。この読み取りは、線状的にテキストの諸区分や単位を同定し、内容を規定し、こうして記号性をもった復元を提示するのである。なぜならこの読み取りは表現と内容を備えているからである。

(iii) 作品であるテキストは、その資格で同時に保存と伝達の対象となる。このことが作品に価値を付与している。つまり、このようなテキストはより深い〈解釈〉を求めるのである。これらのテキストの内容は一層複雑で、その射程は論議になることがよくある。それは宗教的、法律的、文学的、科学的言説に属している。そのためにこのようなテキストは解釈学の恰好の対象となる。したがって文献学は読書プロセスを基礎とするが、解釈学はそれを取り囲んでいる。

作品解釈の行程が電子資料上に記録され、そして対比のためにコーパスに組み込まれるとすぐに、作品解釈の行程が今や確認可能である。それゆえ、ソフトウェアのアウトプットの解釈は解釈の行程の客体化に参与している。

もちろん、文献資料、テキスト、作品の行程の諸規定の間には完全な断絶があるわけではなく、テキスト、

さらには作品の解釈が文献資料そのものを修正するように導くこともありうるということもよく理解されている。かくして、ルネサンス期の偉大な文献学者たちは古代ギリシア-ラテンのコーパスを作成し、修正したのである。たとえばロレンツォ・ヴァッラは1440年『コンスタンティヌスの寄進状』の本文批判を作成し、そしてその文献資料は偽作であると結論づけた。このように、テキストの言語は、文献資料の信憑性と称されているものに異を唱えている。

別のレベルでは、作品理解がテキストそのものを修正するように導くこともある。ポリツィアーノのすばらしい見解にあえて戻らず、トゥリオ・デ・マウロはソシュールの新発見草稿『言語の二重の本質について』のイタリア語訳において、いくつもの箇所、反論できないような極めて明快な方法でテキストの欠落部を補っている。

伝達規定——文献資料が、複製によって他の媒体に移し替えられるため、文献資料の〈保存〉は文献の伝統と呼べるところまで広がっている。こうして文献資料は、一連の物質的変換の連鎖のなかに位置づけられることになる。

テキストの〈伝統〉は知られていない初期テキストから、その後のヴァリエーションにまで及ぶ。たとえ年代決定の問題を出すだけの目的であっても、その〈伝統〉もまた、コーパスで隣接しあう諸テキストにより明らかになる。

最後に、解釈学的〈移動〉は、作品から同じジャンル、そして／あるいは、同じ言説で書き直された、また複数の注釈で解釈を記している別のテキストにまで及ぶ。テキスト間の移動とは一種の間テキスト性であり、その範囲や複雑性はそれぞれの作品を特徴づけることにもなる。

文献学と解釈学との相互依存性：『コーラン』の例——先ほどから、文献資料、テキスト、作品のすべての記述段階で、私が述べてきた識別によって、文献学、言語学、解釈学間の関係を明らかにすることが可能となる。

例を挙げよう。『コーラン』の断片群を照合することで、文献資料の複数性に決着をつけ、テキストの単一性が得られることになった。

このテキストの単一性に作品の単一性は対応している。解釈の単一性はそこから生まれてくる。アル・ガザリー（1058-1111）が、哲学者たちへの反駁の中で、今日に至るまでいっさいの解釈的複数性に、そしていかなる解釈に対しても（イジュティハード）、終わりの烙印を押した時がそうである。

しかし逆説的だが、解釈についての『コーラン』の一節は今も解釈するのが極めて難しい箇所である。実際すべては句読法に左右されており、普及版は以下のように伝えている。「心のなかに邪曲を宿す者どもはえてしてこの文義曖昧なほうに取りつきたがり、それをもとにして異端騒動を巻き起こそうとはかったり、また自分勝手な解釈をこころみようとする。だが、本当の解釈はアッラーとしっかりとゆるぎない知識をもつ人々だけが御存知。彼らは、『私どもはそれ（コーラン）を信じております。すべては神様のおつかわし下さいましたもの』という。ただ心ある人々のみ（かくのごとく）正しく反省する」（§3, 1, 7）。イスラム教の聖典釈義の開始以後、引き合いに出される別の句読法では、反対の意味が伝わる。「本当の解釈はアッラーだけが御存知。しっかりとゆるぎない知識をもつ人々は、『私どもはそれ（コーラン）を信じております。すべては神様のおつかわし下さいましたもの』¹。私たちは意味に宿命づけられていると言うことが

1 Cf. Alain de Libéra, in *Averroes, L'islam et la raison*, Paris, Garnier, 2000, p. 88, note 15. この解釈の単一性が疑問とされた、とりわけイブン・ルシュドによるアル・カザリーの見事な反論の中で疑問とされたことは、ここではほとんど問題にならない。直解主義は、ともかくユダヤ教のいくつかの地域で、たとえば現在の福音主義者たちのように、カライテス派でもてはやされた。目的を除く、その結果は、解釈を読解に、読解を判読、複雑性そのものを排除し、批判的合理性に終止符を打つものに置き換えた。

できた。しかし私たちは解釈から逃れることができるのか。

言語の歴史において作品の状況を復元することは、作品を解釈するための自明な前提であり、そこにおいてもやはり文献学が解釈学を条件付けている。たとえば『神学・政治論』の中でスピノザは、ヘブライ語の歴史は、『聖書』を正統に解釈するために書かれるべきであると断言している（第7章参照）。つい最近でもクリストフ・ルクセンブルグは、『コーラン』の語彙の中にあるアラム語の語彙の敷写しを明らかにしたことで『コーラン』読解を一新した。たとえば、天国を約束する〈天上の美女たち〉は、終末論的祝宴の伝統の中で、突然、真珠のようなつややかなブドウに変わってしまっているのである。

3. テキストモデル

テキスト、文献資料、作品にさきほど上記で示した（図2）文化的対象のモデルを適用するため、このモデルを特定しておこう。それは〈表現〉と〈内容〉との間にある、もっと一般的に言えば、〈媒体〉と〈価値〉との間にある還元できない記号学的二重性を根拠としている。諸言語に関して、この二重性は句読点から章²まで、レクシからテキスト、コーパスまでのいっさいの大きさを対象としている。

考察される大きさの記号学的中心をなすこの二重性は、〈観点〉と〈保証〉との間にある上位の二重性の支配下にある。〈観点〉は単なる観察場所ではない。それは実践と個人的主体、あるいは集団的主体により定義される。そしてデータ処理においては、観点は適用に依存している。〈保証〉とは、検討された単位の評価に基づく認証の審級である。この審級は法律的、科学的、宗教的、あるいはただ単に臆見にもなることができる社会的規範である。コーパス言語学において、保証となるもの、それはコーパスの作成をつかさどる権威である。作家や出版社のような、文献資料になるある種のメタデータもまた、この審級に属している。

たとえば〈水〉のような表現（媒体）は、コンテキストや、その表現が生じたテキストを知り得ない限り、一義的に決定できる内容（価値）をもたない。それは「〈世にも光沢のよい〉真珠」（化粧落としての乳白色のゼリー）、「天水」（ランポー）、「きみの口の水」（ボードレール）のことだろうか。

ところで、テキストは、観点、たとえば著者の観点との関連で、企図に応じて、実践の只中で、ジャンルの枠内で、語り手の様々な形象のなかを移動しながら、組織されている。テキストはその信憑性、文献学的有効性を要約する保証に裏付けられている。こうしてテキストの大きさ全体は、観点と保証の二つの審級により決定され³、どの実践にも特定の観点や保証が対応している⁴。もう一方の極では、コーパスが構成するグループ化のために、観点は、統一された全体のなかにテキストを集めることを可能にすることによって、企図と課題を結びつける。保証のほうはそのグループ化に資格を与え、その信憑性を有効にし、その表象性を正当化する。

したがって価値と、観点と、保証がテキストを制定化する性格をもつことを無視し、いっさいの資料を媒体の審級のみで還元することで、ありふれた実証主義は、批判的で認識論的な次元を回避しているのである。

セミオシスと内容——テキストの二つの面、つまり内容と表現との間にある複雑な関係である〈セミオシス〉は、孤立した記号の構成的関係としてしばしば提示されているが、記述のあらゆる段階、つまり理解さ

2 『一般言語学講義』の編者たちによりソシュールに帰せられた、そして自筆草稿により否定された記号の偽りのモデルをここでは考慮していない。

3 保証が、内的信憑性と外的正統性を一つにしたもので、文献学的伝統から生じているのに対して、〈観点〉とは、ドイツ啓蒙の解釈学とその起源をもつ概念である（クラデニウスによる〈Schepunkte〉）。

4 基本的な、そして二次的な例によって、この問題を明らかにするために、古代の文献資料にある〈署名〉と〈刻印〉の二重性が、観点と保証の二重性を具体的に表している。鑑定の審級は状況と共に、つまり実践論の支配のもと解釈学を位置づけるものと共に、変化する。——新・トマス説の存在論的根拠から遠く、さらに解釈学は存在の開示であるとするハイデガーの主張からはもっと隔たっている。

れたテキストと関わりがある (cf. 発表者, 2001b, sur la sémiosis textuelle)。セミオシスは言語^{ラング}においてコード化されたのではない。言葉の下位段階でも、コンテキストにおいて構築された意味を規定するためには、辞書を参照するだけでは十分ではない。

内容面、そして表現面の中では諸水準の数は定まっていない。文章表現、活版印刷、カリグラムなどの次元で証明されているように、別の記号学によって、それぞれ重荷を背負わされたり、「価値が増し」たりする。もちろんこの問題が文体論では考察の対象となってきたのだが、私たちは各レベル間の相互作用について説明できる統一理論を今もっていない。たとえば表現の等長性へと至る韻律法の、統語論の、記号学のレベル間の平行関係を把握できる。そしてレベル間の交錯のような対位法も把握できる。したがって、意味上で正当化された韻のような一致点を、あるいはマラルメの〈美 (beau)〉と〈墓 (tombeau)〉の韻のようなアンチテーゼを指摘することができる。

コーパス言語学の多元的統計の方法論は、とりわけ、音声文体論 (la phonostylistique) の分野で、これらの問題を明らかにし始めている (cf. Beaudouin, 2002)。記号学的形式を構築するために組み合わせた意味論的、そして表現的形式の理論において、これら観察可能な新たなものはおそらく理解可能となるだろう。レベル間の相伴関係の箇所は、これら形式の特別な箇所とおそらく一致しており、それは検討する文章の大きさに応じて、形式の一部や、あるいは形式一式と関わることになる。

セミオシスは、媒体と価値の関係によって規定されるならば、〈内容〉に付随するものの中にある、その全体を [媒体 ← セミオシス → 価値] と私は名付ける。

エテジスと射程——エテジス⁵という用語から、**観点**と**保証**を結びつけた関係性を、そして射程から、[観点 ← エテジス → 保証] という集合体を相関的に示していく。内容と射程の分化をもっと遠くから考察したい。まず**観点**と**保証**との二極の地位をはっきりさせよう。

A. ——**観点**は個人の主観、ランゲージュに記録された主観性の表現とみなされている。言説、ジャンル、文体次第で、焦点化の概念がいろいろ変化するように、もし発話理論の前提を変えなければ、私たちはこの概念で留まり続けるのだろう。たとえば、物語での内的焦点化は、語り手により決定される。その語り手が主役の時、外的焦点化は、全能の作者の代わりに如く現れ、語り手の違うタイプを差し向ける。表象された発話行為 (内的または外的、見えないまたは見える、様々な語り手たち) の中心以外に、解釈的中心もまた、テキストが向けられている表象された読者のごとく、あるいはテキストが向かわせる暗黙の読者のごとく、**観点**の範疇の中にある。

さて、代名詞、直示辞、そして別の文脈依存指示語以上に、**観点**の概念は、言語学的記述のあらゆる段階で関わっている。たとえば語彙クラスでは、(たとえば、〈背は高くないが、彼は巨人のようだ〉などの文章では) 評価閥全体を**観点**の変化とみなすことができる。

表現に関して**観点**は言語の選択、あるいは (通時的、方言的あるいは文体的) 言語レベルの選択となって現れる⁶。そして内容に関して**観点**はテーマ別、対話形式、そして弁証法的選択となって現れる。表現のように内容のすべてのレベルを調べることが可能ならば、この選択は統合されたエートスを作り上げる。

文学は自らの批評的機能を働かせ、**観点**の多様性や不安定さにつけ込むが、その他の言説はこれらを固定し、さらに消そうとしている。没個性の美学、高等派の、あるいは事物主義の美学の場合、それは客観的、

5 この用語は〈エートス〉から派生させたもので、自ら作り上げたイメージによって、作者が示す**観点**に向けさせる一方、他方**保証**の問題を対象とするものに対しては、倫理に向けさせる。倫理とはソシュールが「記号の営み」に組み入れ「社会生活」と名付けたものに準拠することで、ここでは批判的規範として解釈される。当然倫理には実践的次元があり、実践論に基づいている。

6 たとえば、サン=シモンでは、言語的擬古主義とは保守的な**観点**だと表すことができる。あるいは、ラ・フォンテーヌでは単に遊技的**観点**だと表すことができ、マロ風の軽妙な文体を暗示させる時、彼はその**観点**を用いる。

科学的、法律的、さらには文学的言説となる。

B. —〈保証〉とは、解釈に影響を及ぼす信用できるデータのことだ。その権力の異なる源泉について、テキストでは内的あるいは外的特徴から推断できる。

(i) たとえば、脚注でのテキストの準拠対象は、その源泉の影響力により、その主張を支えてきた。ラビのユダヤ教規範により、在職年数の同じ師の言葉を持ち出すことでしか、昔の師の言葉を批判することができないことになっている。準拠のコーパスは、権威あるまとまりの中にテキストを組み入れる。そのまとまりはコーパスを自らの威光で包んでいた。

しかしながら、解釈は表示された準拠対象に囚われておらず、テキストをコーパスに置かなければならない。そのコーパスは、比較方法論によって、作品としてテキストを目立たせ、こうして特定のコーパスを間テキストに変えたりすることができる。

(ii) 作家の威光は、サインと共に、テキストの主な保証となる。そして名声を得ることで、作家たちは明示された準拠対象の数を徐々に減らしていく（ブルデューの場合よく語られている）。

(iii) 媒体の影響力は、ある時は、素材の豪華さ（たとえば、金の文字の凹版）と結びついたり、またある時は編集に関する名声（作品での文献資料の遡及作用がそこにはある）、さらに選択方法（読書委員会、〈門番〉）と結びつく。

C. —**観点と保証**との連帯性は複雑微妙な問題だが、しかし、それが私の話題の核心である。それというのも、この関連性により、エテジスは特徴づけられるからだ。この二極の二重性を規定するために、まず、そのうちの一つが弱体化している例を取り上げよう。保証なしの観点とは何だろうか。観点のない保証とは何だろうか。作者の名は観点を明らかにすると同時に、保証になるので、作者の名がない時、あるいは間違っ

て与えられてしまった時、何が起こるだろうか。典拠の怪しいテキストはこうした連帯性の恰好の例となっている。たとえば、『一般言語学講義』はもちろんソシュールの名を冠しているが、ソシュールの自筆テキストではない。これにはバイイとセシュエという二人の作者の観点が映し出されている。いくつもの決定的な箇所、彼らの観点は、すでに出版あるいはまだ出版されていないソシュールの自筆テキストの中では、ソシュールによって引き受けられた観点と対立している。したがって、解釈学と文献学との間と同様に、観点と保証との連帯性の証拠がここにはあり、偽作を解釈することは今も無益である。

責任の問題は無効だと考えられたように思われるので、インターネットでは、そのほとんどの部分が、非法の領域のままである⁷。表現の正当な自由の名のもと、経済の急進的自由主義の予想通り、私たちは規制緩和のスペースを作り出した。そこでは、詐欺師がはびこることになる（スパムは不正取引の大部分を表している）。このように、**観点の免責には、保証の不正の性質が反映する。**

責任の倫理的問題は書き言葉に対するプラトンの敵視を生んでいた。自筆性の文献学の問題と責任の倫理的問題は、いかに両者が遠く隔たっ

ていようとも、市民権が認めているように、結びついているのである。無数の言語学的方法により、**観点あるいは保証の優位は保証されている**。現代文学、とりわけ小説は、内的独白でのおびただしい意識のミメーシスのごとく、ジョイスからベケット、サルトルからナタリー・サロト、クロード・シモンの主観的技法を絶えず活用している。それに反して、科学は、大量虐殺否定の作家た

7 たとえば、Amazon では、小児愛のガイドブックや大量虐殺否定論者の作品がある。会社は以下のようにコメントしている。「Amazon は犯罪行為を助長しているわけでも、促しているわけでもありません。ですが、自由に購入を決めるお客様の権利を守ります」。要するに、個人の自由の名を借り、あるいは違法な品物まで広げられた自由経済主義の名を借り、顧客にすべての責任が移し替えられていることは明白である。

ちにより、大いに模倣された客観的技法を用いた。たとえば、いっさいの主観、代名詞、一人称の指呼詞の削除、準拠の増加、数字表のような保証の機能をもつテキスト外部の役割の増加。

いくつかの記号論（図、写真、ビデオなど）を併せ持つことで、テキストの外部は現実効果のように働く。それぞれが異なる、しかし一致する観点を想定しているのだから、読者は不変の指向的印象を作り上げる⁸。空想的世界の創造のために、映像に浸されるメディアは利用される。

それならば**観点と保証**の間の二重性は何ら矛盾せず、**保証**は、源泉が消される**観点**を加えるという仮説を立てることができる。このように、この仮説は臆見に属し、想像上、超越的世界、あるいは遠位領域の中で位置づけられる。要するに、保証とは共時態では統合され、そして通時態では沈下する観点である。

それではこの二重性はどのように釣り合いをとっているのか。絶滅を物語る場合、(犠牲となった)証言者の倫理的計画が、自らの著作に一般的さらには普遍的射程を与えようとする生存者の美的計画と重なる。生きている者たちにとって証言は観点を明らかにするが、証言は死者に向けられている。その代わり、つかの間の喚起はその主題の真実性を保証する。その時、語り手と作家間の二重性の中で**観点と保証**は具体化される。

このように射程の真実性が内容について確実性を定義する。同時に、それらが作品の真実味を作り上げる。だから真実性は本当らしさより優位に立つ。まさしく証言により、ありそうもない真実を認めさせることが可能となる。その点で、証言には批判的機能がある。

文献資料の信憑性、テキストの有効性、作品の真実を識別しなければならないことに留意しよう。ただ、『アンテルム、または文学の真実性』の中で、ジョルジュ・ペレックがいみじくも強調していたように⁹、ただ作品だけは本物である。

信憑性、有効性、真実性との関係は複雑である。というのも、それらは文献学、言語学、解釈学をそれぞれ危険にさらすからだ。文献学的合法性が正統性の解釈学的批評を正当化する今、言語記述を媒介することで、「文字」の信憑性と「精神」の真実性はどうか呼応し合っているのか詳細に語らなければならないだろう。

4. セミオシスとエテジス

さきほど示したテキストモデルは二つの二重性を分節する。その連結は「語ること (le Dire)」と「語られること (le Dit)」との間の分化が繰り返し引き起こす問題を明らかにすることができるだろう。互いにふさわしい場所を占めているが、分離を拒否する点で認知やコミュニケーションと、セミオシス（記号学的媒体）とエテジス（象徴的媒体）の二つの軸はおおざっぱだが一致する。確かに、(内的記号の言説のごとく組織化されているが)言語記号から見れば偽りの自律思考とシニフィアン¹⁰の純然たる外在性に限定するランゲージュとの共通点を除けば、認知のプロブレマチックは、セミオシスを断じて考えさせない二元論から逃れられないままである。コミュニケーションのプロブレマチックについて言えば、メディア研究において、コミュニケーションは〈メッセージ〉の伝達の社会的次元を考慮しているが、メッセージの価値、序列、アクセス権さえも考慮に入れていない¹⁰。

8 この増幅が客観化をもたらすならば、コーパス言語学により、ソフトウェアのアウトプットの機能を、より一般的には、科学における具格的婉曲の機能をよく理解している。しかしながら、観察の産物から科学的成果への変化は、科学的解釈学と呼ばれている。

9 「話して理解されたいという意志、探求して知りたいという意志は、言語、そして文学全体の基礎となるエクリチュールに対する、絶大な信頼に通じる。[...] というのも、まさに表現の超越でもある言葉では言い表せないものの表現、それは言語である。世界と私たちとの間に橋を架けるランゲージュは個人と歴史との基本的関係作り上げる。そこから私たちの自由がうまれる」。また、ハンブルガーとジュネット以後普通に行われていたように、文学とフィクションを同一視することは、この非常に重要な点に気づくことを禁じた。

10 あらゆるコミュニケーションは、確かに、文献資料（メディアの）媒体により、ジャンルやその他テキストの規範により、

ただし、**視点と保証**の間の二重性に関しては、テキストの規範をどう説明できるのか。エテジスは様々な媒体を認めている。最初の媒体は（狭い意味での）発話内容と表現された言表行為との関係を対象としている。たとえば、物語の中で、全滅についての証言者たちは、包括的な〈私たち（*nous*）〉を使い、偽証の語り手は〈私（*je*）〉を使う（cf. Lacoste, 近刊）。表現された言表行為に関わるこの差異は、語られること（*le Dire*）の面における倫理的差異と一致する。本物の証言は第三の説明を弁護する。要するに、のみ込まれた仲間の支配下では偽証は、作家や出版者の（銀行）名義のため、読者に自伝的幻想を提供する。

二番目の媒体は、特定の社会的実践の中で、実際の言表行為や解釈に関わることである。たとえば活動報告の〈私（*Je*）〉は一様に署名を参照させるが、それがジャンルにより定められた規範の中で**視点**を支えるため、写実的テキスト、理解されている小説のミメシスの規定で、信頼できるいっさいの**保証**、準拠、日付、固有名詞を集めていく。

私が〈象徴的媒体〉と名付けた三番目の媒体は、人為的領域と境界との関連づけに実践を加える。その媒体が個人と集団によって具体的に現実化された時、遠位領域がたいてい法律、宗教、科学等の**保証**の源泉とみなされているのに対して、アイデンティティの領域は**視点**の場所である。

当然、この媒体は、様々な討論や衝突の対象となる。たとえば文学では、型にはまった物語において、または、識別困難な語り手において、文化的生成がこの媒体を複雑にする。したがって小説は、特に4世紀前からその批判的機能を正当化していた。

要するに：

- (i) **価値と媒体**との記号学的二重性は、新-ソーシャル理論の観点から、内的言語学で論じられる。
- (ii) **視点と保証**の間でまとめられる二重性、つまり象徴的媒体化にある二重性は、署名としての**視点**と認証としての**保証**から見れば〈文献学的〉伝統と呼ばれ、エートスとしての**視点**から見れば〈修辞学〉と呼ばれ、有効性、正統性、真実味の批判問題と関連するものから見れば〈解釈学〉と呼ばれる。この伝統は、少なくとも私の願いでもあるが、語用論を超越し、内的言語学とはっきりつながっている外的言語学の中では統一されている。

セミオシスについてのエテジスの優位性は、結局、内的言語学に関する外的言語学の定義を表している。したがって**保証**は、型どおりの形式を認めると、**価値**を有効にする。さらに**保証**は解釈によって結びつけられた**価値**を正当化する。文献学的信憑性と解釈学的正統性は、解釈全体の行程の中で作られていく。

倫理的計画と美的計画での形式の関係は、今も芸術史の根本問題である。実際、ある形式も変換可能化（*transposabilité*）により規定され、その独立性は複数の基盤との関係性によって規定される。だが、その変換では何一つ解消されず、たとえば、サン＝タマンの中傷的な恋愛ソネットは内々ではペトルルカ的伝統の批評だが、それでいながら、自ら逆転させたテーマ体系としてソネットはとらえられたままである。

美的計画と倫理的計画との融合は、作品を際立たせる。美的計画は内的価値、そしてセミオシスの特別な形式の生成に属している。倫理的計画は外的価値に属し、共生計画に作品を加えている。以上のように、様式化とは正確性の計画に属している。それゆえ、言語形成の感情的調性が一致して作品の指向的印象を確定するので、エテジスは〈感覚能¹¹〉と一致する。

最後は、解釈学の必要条件により、条件付けられている。コミュニケーション理論にとって、発信者と受信者は（最初、電気機械の）理論的機能だったが、当然、口述と筆記の交換の実際の輪はこの単純化されたものからはみ出している。

11 感覚能とは総合的な評価、感情的な調子につながる〈世界観〉である。つまりこれは、本来のセミオシス、たとえばトピカ、比喩の特徴（ex. 偽ロンギノスの〈*synmorries*〉）、韻律の特徴（ex. 哀歌の二行詩）などの意味的そして表現的形式の組成、構造、展開様式により定義される。古代、中世の三つ〈文体〉、控え目な文体、穏やかな文体、崇高な文体は感覚能を体系化し、そしてジャンルやジャンル群を引き起こす。実際、文学ジャンルは感覚能に特権を与えている（ex. *le tombeau*）。

5. 超文献資料化と複雑性

複雑さと呼ぶ簡略化——文献資料、テキスト、作品の間の三分割、および内容とその射程との間の分化は、数千年間書記文化を特徴づけてきた。それは今日いくつかの収斂的な方法で再検証されている。

1. 情報理論によって貧しくなった記号学と実証主義的コミュニケーション観は「メディアはメッセージだ」というスローガンで正当化する。それゆえ、言語特有のセミオシスは不完全なコード概念にまで切り詰められる。

2. 射程範囲の問題は、たとえ訴訟で著作権の存在を思い出させられることはあっても、倫理的考察がないと徐々に消し去られる。

3. もっと一般的に、そして何よりも教育界で、作品の概念は民主的近代性という名の下に、そしてメディア研究のために忘れ去られている。

セマンティック・ウェブからデータ・ウェブへ——セマンティック・ウェブの構想ははるか遠くまで遡る。メタデータは、文献資料タイプからテキストのジャンル、あるいは作品まで、いくつものレベルにあるものを一緒にし、その出所は問われない。

最も普通の記述的メタデータは「キーワード」であり、それは解釈に取って代わり、というよりむしろ規範的で、物象化され、細分化された解釈の要約である。以下は2007年にセマンティック・ウェブの先駆者たちによって示されたデータ・ウェブが目指すものである。

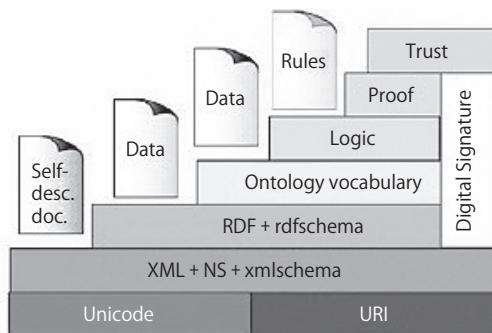


図3 セマンティック・ウェブ (2001)

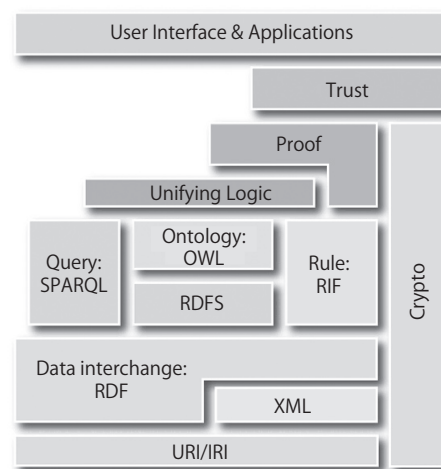


図4 データ・ウェブ (2007)

2001年には、第一階層は URL の表示基準 URI (Uniform Resource Identifier) と文字コード化の国際基準であるユニコードが共に担っていた。2007年になるとユニコードは消え、それと共にドキュメントの文字列も消えていった。^{アフォルシオリ} ましてテキストや作品も同様である。ユニコードはいわば、ウェブアドレスを作成する IRI (International Resource Identifier) に取って代わられた。すぐ上の階層では、保留されるデータは主語—述語—目的語という三要素の基本論理言語である RDF で構成されなくてはならない。

このように、データ・ウェブではインデクセーション (またはメタデータ) しか使えず、したがって、文献資料を文献資料的記述に置き換える。この結果、存在論特有のコード化がもたらした規範削減が行われる。キーワードはそれに代わる存在論の中のテキストよりはるかに容易に、データ・ウェブに「残る」。インデクセーションについてのプロブレマチックは、文献資料が記述に置き換えられるから、判読、読み取り、解

積の問題に対して優位を占めている。

ただし、文献資料の特徴（またはメタデータ）は、その付加に關与する**観点**と無関係ではない。しかし、それは痕跡も残さないし、さらにそこには何の**保証**も存在しない。こうして、文献資料が生まれる原因である実践の欠落は、文献資料の活用に関する条件そのものになると思われる。文献特性群は、出所の辿れない「データ」と結びつけば、文献派生品となる。つまり、それらが対象物の〈探索性〉、すなわち対象物の存在を決定する。

セマンティック・バブル——この発展は、ドキュメントの抽象化の一般プロセスから生まれ、索引化がとうとう文献資料の代わりとなる。それは、たとえば学術的、科学的評価システムとみられる。このシステムでは研究論文の内容についての考慮とは別に、数値や発行物の支援、そしてメタデータだけが考慮される。大企業の世界から発し、行政や軍隊で採用されて、この「知識」機構の方式は、その序列的經營管理的概念によって、あらゆる現実を取って代わり、それによってあらゆる論争、あらゆる経験論的制裁にさえも取って代わる。それゆえそれは「セマンティック」バブルであり、膨れ上がり、このように構想された超文献資料化は国際段階にまで達する¹²。

このバブルの中では、すべてのものはメタデータ群によって定義され、この記録存在の原則は、それが商品であれ、それを買う顧客であれ、文献資料あるいはそれを求めてナビゲーターを使う人であれ、あらゆるものに及ぶ。たとえば、Ertzscheid の表現 (2009) によれば、人も他のものと同じく記録になりうるのである。識別された各行為は、その使用者のプロフィールを構成するメタデータ群に加わる。すると今度はそのプロフィールが、価値ある交換商品になる。

この点では、索引化するために産業面で記録をかけめぐる検索エンジンと、それをクラス分けする存在論との間の戦略的相違は二次的なものである。検索エンジンは、このように記録化された社会的な世界での経験的多様性に、依然として唯一アクセスできる。しかし検索エンジンの結果が、使用者、顧客、商品、記録が相互操作可能になるデータ・ウェブを豊かにするのは、質的索引化と量的格付け^{レーティング}の共通フォーマットによって表されるからだ。

「知識」のフォーマットの一般的な統一では次のようなことが見えてくる。「人間は二つの源泉から情報をひき出す。一つは一般メディア、もう一つは教会のような家族、隣人、同僚同士によるネットワークのような情報の集まる組織である。私たちはまず前者をデジタル化した。[...] ザッカーバークがフェイスブックでやろうとしていることは後者のデジタル化だった」¹³。「社会意味論」といわれるウェブのために協働する社会ネットワークの何千万人も使用者がその広がりを見計し、そのグラフを描くために、自ら固有のインデクセーションを豊かにする。使用者全部で全人類をなす可能性もある。それゆえマーク・ザッカーバークは社会グラフを、「世界中のあらゆる人々の関係全体」と定義する。「すべての人を含有するたった一つのものがある。しかしそれを所有できる人はいない。われわれがしようとしていることは、現実の世界を数学的モデルで表し、その地図を作成して正確に表すことだ」(in Ertzscheid, 2009, §2.1.)。それゆえ、社会的世界を所有することは、電子アイデンティティが正確に各個人のアイデンティティを表すことを仮定している。しかし、地図がまだ領土にならない間は、個人のアイデンティティは電子アイデンティティにまで縮小して考えるべきだろう。というのも、社会的ネットワーク——まず第一にフェイスブックが挙げられるが——

12 〈超文献資料化〉によって、その資料化したメタデータによってテキストを置き換え、メタデータへのアクセスによって読み取る手順を示している。

特に、セマンティック・ウェブ・コンソーシアム (W3C) はテキストに対する故意の沈黙を守っている。ティム・バーナーズ＝リー卿は間違いなくそのリーダーである。彼はインタビューやパワーポイント、またビデオによって意見を述べてはいるが、彼の戦略的選択を説明する作品はおろか記事を書くことも控えている。

13 Vogelstein, 2007, 拙訳。

そのネットワークへの依存の増加に見るように、その地図がアイデンティティを形成し始めているからだ。

すべての規格化同様、フォーマットの統一は技術的利点をもっているかもしれない。しかしその統一は、また（〈モナド論〉から生じた）単一網の主題と「普遍的特長」をもつ意味論を自分なりのやり方で実現するセマンティック・ウェブの野心さえもがそれを思い出させるように、その推進者の想像領域内では、普遍的記号学の、ライブニッツタイプの役割を引き受ける。この特長とは完全なる言語であって、あらゆる言説、あらゆる記号を表現でき、法学、倫理学、数学、物理学、音楽などと同じく形而上学にも重要だった。それは普遍論理計算（*calculus ratiocinator*）を可能にした。しかし情報学の論理的基礎が形作られる『結合法論』（1666）で芽生えたライブニッツの普遍的記号論は、明白に神にその根拠を置いていた。現在では、それはグローバル化を伴う普遍的超文献資料化のテクニクに取って代わられている。

複雑性の解釈学的復元——もし電子資料のヘッダー（*header*）に、それが伝えるテキストや作品に関するメタデータを「記憶する」ことが許されるなら、データとメタデータとの間の分化を明確にすることで、記述レベルを注釈レベルと見ることが可能となる。文献資料に関する文献学の情報は媒体として、言語学の情報はジャンルとして、オペラと言えそうな作品に関する情報は倫理的、美的計画としてみなされている。

また、「データ」のごとくメタデータを静的にとらえてはいけない。メタデータもまた解釈の結果である。テキストの日付や作者の名前でさえ、批評方法から検証される必要がある。もし解釈の結果のいくつかは、メタデータへ移し替えられるならば、解釈の全行程はそれに適しておらず、さらに、たとえば解説の形では複雑性のある程度維持する必要があることに触れておこう。メタデータは、確かに文献資料を索引付けするが、読解や解釈を実行し、一足先に行う。すなわち、「知識」とはただ無視された行為であり、そしてメタデータに還元できない操作的連鎖を実行に移す解釈の行程でしかない。

ヘッダーに入力可能なメタデータは、知識を生み出すことができ、そして解釈の規定（たとえば、ユダヤ教の解釈の *middot*）に関する、あるいは不自然な解釈の場合、任務の制限に関する行程を記憶し続ける。メタデータの記録は、たいていマークアップだが、観点と保証を必ず前提とする実践と無関係な任務ではない。

一般に先入観を投影させるだけの直解主義とは別に、文献学的語意、あるいは解釈学的語意で重視されているので、〈難解〉の概念にしかるべき地位を与えなければならない。たとえ透明性の概念は解釈学の中では最もわかりにくく、そして明証性の概念は文献学の中では何よりも惑わせるものだとしても、難解さ、とりわけ注意もされない難解さは、発見的価値を備えている。新たな難解さを発見するには決定的直観を必要とし、それが確認されるのは、解釈の新しい行程を切り開くことで、難解さが互いに解明し合うまで、私たちは難解さ同士を結合させたり、対決させたりする時である。繰り返し起こる難解さはテキストの意味論的、表現的本質を明らかにするようになり、特異な難解さは意味論的、表現的形式を明らかにするようになる。以上のように、簡単に述べたこの難解さは、テキストの鍵を与えることができる。しかし曖昧な言葉を（たとえ、それが待ち望まれていたと対比のコーパスが物語っていたとしても）、あるいは、省略された箇所を特定することで、コーパスが目立つようになり、さらにコーパスが包み隠しているものにより、テキストを解釈することができる。

記号学の発展——一般記号学の展望では、文化的対象としてのテキストモデルについてここで私が述べた説で、（媒体と保証との関係性から）一方では〈文献資料〉の、もう一方では、価値と観点の関係性から〈作品〉の特徴をもつことが可能となる。最初の二重性は、文献学の重要な場を作り上げ、それに対して、二つ目の二重性は解釈学と特に関わり合う。解釈学と文献学との相互遡及作用を取り戻すように、この非対称性は文献資料、テキスト、作品の相互依存性を証明している。

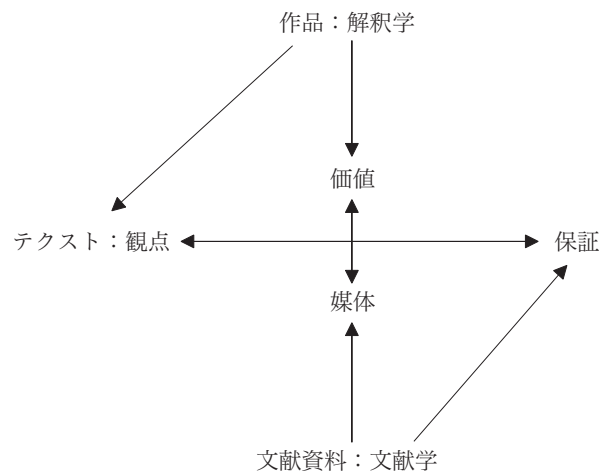


図5 情報科学の規範と極

私たちの意図が招くのは、記号学の解釈学化というよりも（そうは言っても、大変必要なのだが）、解釈学の記号学的再興なのである。すなわち、文献学的〈文字〉と精神を和解させるような仕方、記号学の二元論を認めず、シニフィアン面とシニフィエ面との二重性のために解釈学を記号学的に再興しようとするのである。

エテジスがセミオシスを越えるように、**観点と保証**の諸問題は諸言語を越える¹⁴。私が制限によりセミオシスを特徴づけたように、セミオシスは観点と保証に対して特殊なものに留まる。

ここで紹介した文化的対象のモデルもまた、非言語的運用にも適合するかもしれない。実際、（おそらく形式言語を除いた）記号学の数々、その必要条件と一致するようだ。内容と射程、文献資料と作品、特別な文化的対象とそれに特徴をつけることができるコーパスについて提起した一般的な問題は、実際あらゆる文化的対象と関わりがあるのである。

参考文献

Beaudouin, V. (2002) *Rythme et mètre du vers classique. Corneille et Racine*, Paris, Champion.
 Berners-Lee, T. et al. (2001) The Semantic Web. *Scientific American* (Mai).
 Berners-Lee, T. et al. (2006) Creating a Science of the Web, *Science*, 313, n° 5788 (Août), pp. 769-771.
 Berners-Lee, T. (2009) *The next Web of open, linked data*, Conférence TED 2009, vidéo, février.
 Briet, S. (1951) *Qu'est-ce que la documentation ?*, Paris, EDIT.
 Giffard, A. (2008) Lectures industrielles, Billet *Ars Industrialis*. (En ligne : <<http://www.arsindustrialis.org/node/2879>>).
 Lund, N. W. et Skare, R. (2010) Document Theory. In *Encyclopedia of Library and Information Sciences*, 3° éd., Taylor & Francis, pp. 1632-1639.
 Ertzscheid, O. (2009) L'homme est un document comme les autres : du World Wide Web au World Life Web, *Hermès*, n° 53, pp. 33-40.
 Levi, P. (1999) *À la recherche des racines*, Paris, Mille et une nuits.
 Malrieu, D. & Rastier, F. (2001) Genres et variations morphosyntaxiques, *Traitements automatiques du langage*, 42, 2, pp. 547-577.
 Nagel, T. (1988) *Die Festung Des Glaubens, Triumph des Scheitern des islamischen Rationalismus im 11. Jahrhundert*, Ed. C. H. Beck.
 Pédaque, R. T. (2003) Document : forme, signe et médium, les re-formulations du numérique, (Document en ligne : <http://archivesic.ccsd.cnrs.fr/sic_00000511.html>).
 Pédaque, R. T. (2006) *Le Document à la lumière du numérique*, Caen, C & F Éditions.
 Perec, G. (1992) Antelme ou la vérité de la littérature, dans L. G., *Une aventure des années soixante*, Paris, Éd. du Seuil, pp. 87-114.
 Rastier, F. (1996) Représentation ou interprétation ? — Une perspective herméneutique sur la médiation sémiotique, in V. Rialle et D. Fiset (dir.), *Penser l'esprit : des sciences de la cognition à une philosophie de l'esprit*, Grenoble, Presses Universitaires de Grenoble, pp. 219-

14 図2で示したモデルの4つの極を想定し、もし、私たちが記号論の体系を特徴づけるなら、形式言語は観点を必要とせず、その保証は内に留まったままだとみなすだろう。というのも、形式言語が適切な形成規則を設けた途端、形式言語そのものから正統性を作り出すからだ。その点で、確かに形式言語は道具であり、神話や典礼には適していない。結局、外的保証がないので、形式言語にはコーパスも歴史もない。

239.

- Rastier, F. (2001a) L'action et le sens. — Pour une sémiotique des cultures, *Journal des Anthropologues*, 85–86, pp. 183–219.
- Rastier, F. (2001b) *Arts et sciences du texte*, Paris, PUF.
- Rastier, F. (2008) Que cachent les données textuelles ?, Conférence invitée, *Actes des IXe Journées d'Analyse des Données Textuelles*, Presses Universitaires de Lyon, édités par Serge Heiden et Bénédicte Pincemin, tome I, pp. 13–26.
- Rastier, F. (sous presse) *La mesure et le grain — Sémantique de corpus*, Paris, Champion.
- Salaün, J.-M. (2010) *Utopie des ingénieurs et appétit des entrepreneurs*, 3ème Conférence Document numérique et Société — 15–16 Nov. 2010, IEP d'Aix en Provence, 8 p.
- Valla, L. (1993) *Sur la donation de Constantin, à lui faussement attribuée et mensongère*. [« De falso credita et ementita Constantini donatione libri duo »], Paris, Les Belles Lettres, coll. La roue à livres, [Lyon, 1547 (réimpr.)], (éd. Jean-Baptiste Giard).
- Vogelstein, N. (2007) The Facebook Revolution, *Los Angeles Times*, 7 octobre.

(GCOE 研究員 内田智秀 訳)